

MATSURISTA!

マツリスタ

Japanese Festival Supporters Magazine 日本の祭り応援マガジン

vol. 01

2012 夏号

500円

マツリスタ
祭り人、語る

小岩秀太郎氏

公益社団法人

全日本郷土芸能協会 職員

神楽絵

栗田知佳

鹿踊 の担い手から

復興支援へ

東北の芸能の

連載スタート!

楽器に注目 民俗芸能

熊野地方と祭り

わたしの地狂言雑記

民俗芸能なう!

<http://maturista.blogspot.jp>

MATSURista!

01

2012 夏号

- 04 **神楽絵** 栗田知佳
- 10 **祭人、語る** 公益社団法人全日本郷土芸能協会 **小岩秀太郎**氏
ロングインタビュー「**鹿踊**の担い手から、東北の芸能の**復興支援**へ」
- 28 **楽器に注目！民俗芸能 第一回 鉦留め太鼓** 編 新美優
- 36 **熊野** 地方と祭り（1）**山の盆踊り** 編 大竹雅子
- 42 わたしの**地狂言雑記** 館野太郎
- 46 **民俗芸能なう！** ep.01「民俗芸能STREAM始まる！」 西嶋一泰

【MATURista】 [祭り + ista (伊 ~ なる人)]

祭り好きで好きでしようがない祭りに関わる人びと。

祭りを担う人、支える人、観る人。そのすべてがマツリスタ。

栗田 知佳

くりた ちか

Chika Kurita

東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻4学年在籍

自身の視点で撮影した写真から絵を描く

現在里神楽の演目を題材に『神楽絵本』を制作中

【略歴】

1990年 静岡県生まれ

2006年 常葉学園菊川高等学校美術デザイン科入学

2009年 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻入学

野菜をモチーフとするだまし絵を制作

2011年 江戸の里神楽に出会う

『天善比神』制作

江戸の里神楽にはまる

2012年 神楽絵本『天孫降臨』制作

里神楽にのめり込む

現在同大学4学年在籍

【制作の相棒】

デジタル一眼レフカメラ EOS Kiss X2

鉛筆、ペン型消しゴム、透明水彩、アクリル絵具

【作家ホームページ】

「神楽絵師 栗田知佳」

<http://kazaori.ebo-shi.com> (風折烏帽子.com)

こちらで作品をご覧頂けます。

私が神楽に出会ったのは、去年の6月のことです。

大学に入って2年半、制作に行き詰まりを感じ、自分の興味と画風にぴったりな題材はないかと模索していた頃。伝統的なものや日本的なものが好きで、民族衣装について調べたり昔話を讀んだり、お祭りに行つて写真を撮る事が私の楽しみでした。

ある日東京の神社のお祭りで「江戸の里神楽」というものが観られると知り、行つて観たところ、一目でその魅力に引き込まれてしまったのです。

装束とそれに用いられる文様、面(おもて)、神社の建築や凛とした空気、お祭りの活気。

神社で行われる儀式であり、伝統的な芸能であり、しかしその中に観客を楽しませるような笑える場面もあるし、ただの舞ではなく日本神話を元にした劇であるという点にも大きな魅力を感じました。

江戸の里神楽には、私の好きなものが全て詰まっているのです。

現在は、他の地方の神楽やまつり、神社、古事記等にも興味を持ち、『神楽絵師』として制作をしています。



「彦彦之命」

祭り人、語る

マツリスタ

小岩秀太郎氏

公益社団法人 全日本郷土芸能協会 職員

きよどりゆいまいかわしおどり

行山流舞川鹿子躍踊り手

聞き手 西嶋一泰 マツリスタ編集部

鹿踊の担い手から

東北の芸能の復興支援へ

祭りが好きで好きでしようがない、芸能に骨の髄までどっぷりハマリ込んでしまった、現代の祭り好きたち。本誌ではその人びとを、「祭り人(マツリスタ)」と名づけ、毎号インタビューを通し、その生息に迫っていくと思えます。

※鹿踊(ししおどり)

獅子踊、鹿子躍とも。岩手など東北に伝わる芸能。「シシ」は動物一般を指し、地域により鹿、猪、獅子など様々なものがみられる。小岩さんの地元、舞川では「鹿子躍」と表記され、以下、本稿でもそれに従う。

西嶋 今回のインタビューでは、芸能にどうハマっていったかとか、どういう思いを持つてるかみたいな小岩さん個人の体験を中心に伺っていきたいと思います。一応読者の対象としては、芸能に興味があるんだけどどんな芸能があつてどういうきっかけで触れて、どう楽しんでるのかわかんないって言う人たちに向けて、こんな人がいます。「こんな変わった人がいます(笑)みたいな話を」

小岩 掘り下げられると(笑)

西嶋 そうです(笑) よろしくおねがいします。まず最初なんですけど、そもそも小岩さんが芸能に触れたきっかけ、原体験を、ご出身なども含めた所から、お願いします。

身近ではなかった鹿子躍

小岩 俺は岩手県の一関市出身なので、一番最初は、一関市の舞川、その中でも相川という地区があつて、そこにもともとある鹿子躍という芸能。昔はずっと庭元制だとか、長男さんしか出来ないとか、そういう決まりごとがあつたんだけどね。やっぱり過疎地だし、集落的にも段々人が少なく

なっているから、鹿子躍自体は昭和、戦中に1回切れちゃったんだ。戦後にもう1度やりましようという人たちが何人か出てきて、保存会を作ったわけ、昭和32年に。それからちよこちよし皆やっていたんだけど、大人しか出来ないし、子どもたちなんかなかなか観る機会もないし、芸能としてしようちゅう見られる物でもなかったわけ。神社のお祭とかにもたま



由研究があった。その時に、鹿子躍っていうのを、自分のふるさとのものだから調べたっていう変わったやつ中学生がいたわけ。

その頃、子どもはみんな鹿子躍なんか興味なかった。江刺とか、北上のほうに比べると全然芸能なんか一閑つて弱いところなんだよね。だから興味なかったんだけど、なぜかそこでちよつと調べた

にしか出ないくらい感じで、儀礼的にちよつと弱い保存会だった。

中学生の先輩の故郷研究から

鹿子躍が学校で始まる

だけど、僕が小学生の頃、そのときの中学校で、「ふるさとを研究してみよう」という、夏休みの自

いつていう人たちが出てきたら、保存会の人たちは嬉しかったんだろうね。ちよつと相談に乗りましようっていう話になって、相談に乗ったら結構先生たちも乗ったりしてきて、面白いことになりそうだから、ちよつと練習とかもしてみたいな感じになったんだって。

その時は小学校4年生だった

けど、そのことはもちろん知らなかった。鹿子躍もそんなに知らなかった。いとこが親戚の家に写真とかがあったのはみてただけで、全然興味もなかった。

いきなりやらされた鹿子躍

そういうのもあって、だんだん舞川の鹿子躍っていうのが知られ始めて、地区の人たちにもちよつとわかるようになってきたっていうので、昭和63年の8月、小学校の5年生の頃、小学校でもちよつと教えたいみたいな話になったの。先生たちも嬉しくなつてね、乗り気になって。その頃まだ師匠たち、

80歳の師匠もいたんだけど、戦前からずっとやってた人たち。その人たちが教えに来て、鹿子躍を小学校の4、5、6年生に無理矢理やらされた、最初の頃は。

西嶋 それはクラブで？

小岩 いや、5、6年生の全児童が地域体験で、クラブで言うより授業の1環で放課後に練習したりで、やり始めた。まあその頃は子供だから、何でそういう風になったかはよくわかんなかったけど、いきなりおじさん……おじいさんたちがやってきて(笑)。



一関市：岩手県南部、北上平野の南端。空飛ぶダンゴで有名な景勝地、厳美渓や、鎌倉時代の絵図そのままの区割りが残る骨寺荘園遺跡がある。鹿子躍のほか、南部神楽なども盛んな地域。種類豊富な餅料理はぜひご賞味あれ(編集部)



ベニヤ板を組んで鹿頭をつくった
舞川の人々手作りの子ども鹿

地元の人びと手作りの子ども鹿

その時はね、装束も何もないわけ。当然。子どもは鹿子躍なんて初めてやる訳だし、しかも他の地域の、若手県のどうかの芸能団体さんがそういうことをやってたっていうのも知らないで始めてるの、うちの小学校は。相川小学校っていうんだけど〔編集部注 今は廃校、合併して舞川小学校〕。みんな手探りで始めたんだけど、学校の先生たちがすごい協力してくれ

たりとかして、地域の人たちも、建具屋さんとかが大工さんとか、そういう人たちが協力してくれて、一から鹿頭と太鼓と、ささってという背中に背負うやつ、あれを子供用に作ってくれたわけ。なんだけれども、お金がまずないから、本当に。

すごいんだ。まずベニヤ板の鹿頭。本当は彫り物じゃない？ 鹿頭つて。ベニヤで、板切ったやつを張り合わせて、すごい軽くて、角はダンボールで作って、顔なんか、

幕踊り系の鹿頭みたいな感じで〔編集部注 いわゆる「ししおどり」には、お腹に太鼓をつけ叩きながら踊る太鼓踊り系（小岩さんの舞川鹿子躍はこちら）と、太鼓はつけず、幕を持って踊る幕踊り系がある。幕踊り系の角は動物の鹿の角ではなく、作り物を用いる〕。

それに、袴の部分をふつうの風呂敷、薄いやつあるじゃない？あれで作ったんだよね〔笑〕。

ザイっていう髪の毛があるじゃない？ ザイは……思い出したら面白くなってきた〔笑〕 ザイはね、ポンポン。スズランテープみたいなやつ。あれを紫色にスプレーしたのをくっつけてやった。

で、太鼓はドラム缶というか、屋根に使うトタンを曲げてまず枠を作るの。そこに革がないので、金がないから。だから農家の持っている農業用の肥料袋を張った。パチはその辺に生えてるから、本当に鹿子躍の使うパチは、カナマカリ〔編集部注 クマツツラ科のムラサキシキブ〕っていうんだだけ。

西嶋 それは何ですか？

小岩 細い木で軽くて、中にちょうとふわふわなスポンジ状のものが通っている木なんだけど。それは

簡単に、その辺から持つてきて。
西嶋 その全体的な設計は誰が作ったんですか？

小岩 その頃の保存会長、今の保存会長のお父さん。千治さんっていうね、偉い先生がいたんだけど、その先生たちが、廉価なグッズで間に合わせるんじゃないかと、鹿子躍の装束に合わせた形で、作ったわけ。そのまんま。大人一人だけ、中立ちっていうリーダーだけは、普通の鹿子躍の格好をおじいさんがやっていて、そこに小学生たちの、6年生がパーッと並ぶという。あん時ね、俺らの同級生が27人だったけど、その上も25、6人だと思う。だから全部で70人くらいがやってたんだ、鹿子躍。

西嶋 装束は、全員分作ったんですか？

小岩 全員分作った。

西嶋 へえー！ それは作る人も地域の人だったんですか？

小岩 地域の人。もう同級生のお父さんが大工さんみたいなこともあったし、そういうので一気に全部作っちゃった。多分ボランティアでしようね。

ベニヤとかもその辺にあまってるの使えばいいから。あと色塗りとかもやったんだろ。うね。聞いたとい



たら面白かっただろうなあ。

西嶋 それは……すごいですね。

小岩 小学校の運動会とかで、やりましようという風になって、練習をいきなりさせられて……

西嶋 いきなりさせられたときはどうだったか覚えてます？

ご飯と本が大好きな肥満児が

鹿子躍に出会った

小岩 いきなりさせられたときは、俺はその時5年生で、その頃すごい肥満体だったのね。すごかった。もう運動大嫌いだし、飯食うの大好きだし、とにかくご飯さえあれば、ご飯と本さえあればいい人だったから、もう運動なんか嫌だし、こんな踊りなんかやってられつかとか思うぐらいの、本当に嫌だったんだけど、何なんだろうね。

その先生たちに、とりあえず、鹿子躍って腰を下ろさなきゃいけないんだけど、腰を下ろすっていうこと自体を、みんなやりたがらない。普通の児童さんたちって。

でも俺ってその辺ちよっと変わってて、みんながやりたがらないことをやりたい人なのね。みんな恥ずかしいとか言ってるのを、俺は変に義憤に駆られて、「そういうのは

やるべきじゃないか！」みたいな、みんながやりたがらないからやりたいし、みんながやるのだったらやらないし。だからみんながやらないうつていうから「じゃあ俺やる」って(笑)。天邪鬼的な感じだったわけさ。

それで、なんだかんだでやるっていう話になったんで、ほめられる、すこく。「お前腰下がっていいじゃねえか」みたいな。鹿子躍って今になってやるとそうでもないんだけど、結構カシラを振ったり、足を後ろにはねあげながら踊るわけ。こういう踊りはやっぱり小学校の頃って皆恥ずかしいじゃない。

西嶋 やり始めるまでに抵抗がありますよね。

小岩 そう。カシラ振るとか、足をすこい跳ね上げるっていうのも俺はなんかすこかったんだって(笑)。どうやら、一心不乱に、バカみたいに。スポーツも今までやったことないから、身体の動きなんかわからないままにやるから、すこい動きをしたらしいのを、みんな「ああお前はすこい上手い」って言うって。だからその、70人だけ50人だけいる中で、1番目立つ存在だったの、なんとなく。

だから、褒められた。とりあえ

ず。今までそういう動くことに慣れて褒められたことなかった俺が褒められたっていうことで、多分調子に乗ったんだね(笑)。で、嬉しくて、運動会来るのも嬉しかったし、他の走る種目なんて大っ嫌いだったのに、踊ることだけにとりあえず向かって練習してたわけね。5年生のときにやったんだけど、6年生の運動会るときは出れなかった。なぜかという骨折したから(笑)。泣いたよ。「鹿子躍やりたかったのにー」って。

はしゃいで骨折…

運動会で鹿子躍踊れず！

西嶋 相当思い入れのあるものになってますね、その時点で。

小岩 そう。で僕がその時6年生で、児童会長をやっていた、スピーチもしなきゃいけない。鹿子躍もやらなきゃいけない。「もうこれは……」って言うてる2、3週間前に、俺はなんか1人で小躍りしていて、嬉しくて。で、しかもちよっと運動出来始めてたの、鹿子躍のおかげで。

鎮留め太鼓 編

新美優

民俗芸能の楽器とは？

皆さんは楽器というと、何を思い浮かべるでしょうか？基本的には、ピアノ、バイオリン、リコーダー、ギター、ハーモニカなどでしょうか？

さて、日本の楽器となるとどうでしょうか？ 尺八、箏(こと)、三味線、笛あたりでしょうか？太鼓もありますね。とはいえ、「楽器」と言われて日本の楽器を思い浮かべる人は少ないんじゃないでしょうか？

それほど、現代人からは遠ざかっている感じが薄くなってしまった日本の楽器。さらに「民俗芸能の場

面で使われる楽器には何があるのか？」なんて質問されようものならますます、想像がしにくいのではないのでしょうか。

一般的には、お祭りで見える笛太鼓のお囃子がイメージしやすいでしょうか。確かに笛太鼓の組み合わせが一般的なのですが、それがクセモノ極まりない。パツと、見た感じは「どこも一緒だなあ」と思われるかも知れません。でも実は太鼓一つとっても、その地域の音色の好みが反映される分、全然別物になるのです。皮の張り具合、椀(はち)の形、たたき方、などなど。それこそ、同じ太鼓を使っているも、地域によって使い方がまったく違っていたり。そういうところが民俗芸能の世界では当たり前のようにあります。さらに、その地方でしか使われないレアな楽器もあつたり。「とろろ変われば品変わる」ということわざがびつたりなのが、民俗芸能の世界です。

僕自身、民俗芸能のすべてを見ていくわけではありませんが、実際に見た民俗芸能や、個人的に「一度は見てみたいなあ」と思うものを中心に、日本の楽器の面白さ、奥深さをこれから紹介したいと思います。民俗芸能の楽器は、なん



図1 いわゆる太鼓。
でも、これ以外にたくさんの種類の太鼓が日本にあるのです…

とまあ奥深いことか。これから皆さんと一緒に見ていきましょう。それは、日本の楽器への、ディープな旅へ、御一行様(案内)。

日本の太鼓の特徴

日本に古くからある楽器の中でも、打楽器はとて多種が多く、さらにその中の太鼓というのは、一番

といてよほど改良や変化が激しく、多彩なものになっています。この記事を書いたら書いていますが、内心は本雑誌執筆陣には僕よりも

太鼓に詳しい人がいるので、「うわあこんな大それたテーマで書いてやって。いろいろ突込み入るよ、これ。」と、実は内心ビビリながら筆を進めています。それぐらい、日本の楽器を語るうえで「太鼓」というのは「重大」で、骨の折れる「やっかい」で、しかも「すこく面白い」存在なのです。

今回の太鼓に関する記事は、参考資料として基本的に、吉川英史監修(1992年)『図説日本の楽器』東京書籍に書かれた小島美子(じまとも)さんが執筆し

た「民俗音楽の太鼓・つづみ類」の記事をもとに、書いていきます。以下、「この資料をさす場合は単に『図説』と表記します。

鋳留め太鼓の話を進める前に、日本の太鼓にはどういう特徴があるのか、簡単に述べておきます。『図説』によりまずと、外国には、太鼓の皮の大きさが裏と表で違うものや、胴の片方に一枚しか皮を張らない太鼓「片面太鼓」も存在するそうです。

「片面太鼓」は日本には例が少ないのですが、「うちわ太鼓」という、金魚すくいで使う「ポイ」をそのまま大きくしたような形の太鼓があります。

これは日蓮宗の人が使うことで有名ですが、これ以外の片面太鼓となると、日本国内ではあまりないようです。『図説』には沖繩の「パーランク」という小さな太鼓や、北海道の少数民族が使う「杵太鼓」ダーリ、ユル、カチヨーなどと呼ばれるものが紹介されています。

逆に考えると、これ以外で日本の民俗芸能の場で胴の片方に一枚しか皮を張っていない太鼓を見かけた場合は、もしかしたら重大発見かもしれません(ただ単に片方の皮が破れてそのままにある場合も考えられますので要注意ですが…)。

日本の太鼓は、牛の皮を使うのが一般的だそうです。担ぎ太鼓などに

は、馬の皮を使う場合もあります。これが日本の場合には当たり前なのですが、中には特殊で、『図説』によりまずとまれに「紙」を貼る場合もあるそうです。どんな音がするのでしょうか？ 僕も実際に音色を聴いてみたいものです。外国には、羊の皮、中にはトカゲの皮を使う例もあります。楽器の材質に関しては、調達できる材料によって変化しますから、当然と言えば当然かもしれませんね。

日本の太鼓の胴は、ほとんどが木製品で、ケヤキなど硬い材で作られることが多いです。しかし中には、素材(FRPなどのプラスチック)を使う太鼓や、外国産の材木(ケヤキ以上に硬い材木)を使う例、真鍮(しんちゆう)製もあつたりと、日々変化しています。一つの材木をそのまま使う「くり抜き胴」(図1もくり抜き胴の太鼓)もあれば、寄木(よせぎ)の方法で作った胴、「桶(おけ)」の要領で丸く円筒形にした「桶胴」、まげわっぱの要領で薄い材木を丸めて作った胴など、様々な胴の作り方があります。

あとは、全体的に素手では太鼓を叩かないということが日本の太鼓の特徴の一つです。確かに能楽の「鼓(つづみ)」のように、手でたたく例はあります。しかし、日本の太鼓全体か

らみるとそういう例は少ないということは、記憶にとどめておくと、民俗芸能を見るのも楽しくなると思います。実は民俗芸能には素手でたたく例がまだ未発見の場合があるかもしれません。

太鼓の数え方

皆さん、太鼓はなんと数えていますか？ 実は、恥ずかしながら僕も知りませんでした。地域によって違うそうですが、「張(はり)」とか「張(ちよう)」と数えるようです。皮が張つてあるものだからです。皮が張つていないものから世界は広いので僕が伺つただけでも「個」「台」「基(き)」「丁(ちよう)」など、いろいろあります。その土地でどうやって数えるのか、それだけ調べるだけでも結構骨の折れる作業です。普通はそんなことやらないのですが…。お祭りマニアな人はそこまで調べ上げる人がいたりしますので、恐ろしい世界です。

太鼓の音は「ドンドン」「ドーン」

「テン、スッテン、テンツク」「チヤンチヤンチヤラボコ」「ダダスコダン」。さて、これは何を表したものの

でしょうか？ 実は、全部太鼓の音をあらわしたものでなんです。太鼓の音は、擬音で表す場合、「ドンドン」とか「ドコドコ」と表現されるのが多いでしょうか？ この音は一般的に聴くと、盆踊りの太鼓、大売出しで聴く太鼓の音からの印象が強いからかもしれません。

しかし、先ほど紹介したとおり、ほかにも太鼓の音を表現する言葉が地方にはたくさんあります。鼓は「ボンボン」とあらわされる通り、太鼓の一種でありますが、盆踊りの太鼓の音とは、なるほど、かなり異質なものです。同じように、太鼓の音を聴き慣わすのは、その地域の方にも影響してきますが、確かに現地でその民俗芸能の太鼓の音色を聴くと「ほんとは、さつき地元の人が言つた太鼓の擬音に聴こえる！」と、感動を覚えることもしばしばあります。それぐらい、デリケートではあります。太鼓の音色は地域や民俗芸能の種類によって左右されるものです。

熊野地方と

祭り(二)

山の盆踊り編

大竹雅子

「熊野」

夏が近づくと、日本各地で盆踊りの季節がやってきます。踊りの日が近付くと、私は足の裏がなるとなくすり足になつてうきうきしてきます。太鼓の音、音頭取さんの唄、踊りの輪：山の夜の、ささやかな楽しみ。私が住む熊野地方もお盆になると普段は都会に出ている人達が里帰りして、夜は踊りの輪が出来て賑わいます。

熊野という所は本州から岬のようになり、和歌山県・三重県・奈良県にまたがる広域で、熊野古道は「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産にもなり、古くからの信仰が息づいています。そこには熊野三山と呼ばれる3つの大きな神社、熊野本宮大社・熊野速玉大社、熊野那智大社があり、

郷土の歴史の中心となつています。

私が神奈川から嫁いで熊野に住むようになり17年が経ちました。ここ和歌山県田辺市本宮町は山奥で電車がなく、私が初めて訪れた20年前はなぜか一番遠いルートから、日本で一番長い路線バス・八木新宮特急バス(走行距離166.9km、停留所167箇所)に乗り、奈良県五条市から4時間かけて本宮町まで長旅をしました。前日に地元タクシーの運転手さんにバスの事を教えてもらったら、翌日初めて乗ったバスの運転手さんに「あなたかい? 横浜から来たつという人は。」と声をかけられ、田舎情報網のスピードの速さにもびつくりしたもので

す。



熊野・大塔山系の山々。ツキノワグマや天然記念物のカモシカも住んでいます。夜に車を走らせると猪、鹿、狸、狐、兎、等々沢山の動物に出会う天然サファリパーク状態です。(写真:み熊野ねつとより)

初めて乗った長距離バスは電車のある町からどんどん、どんどん山奥へ。あまりの山奥で驚きましたが、それもそのはず、町の面積の9割が森林です。熊野の森は、今は林業が盛んだった頃に植えられた杉と檜が多いものの、元々はシイやカシなどドングリの成る木の多い照葉樹林でした。

現在日本でまとまった面積の照葉樹林が残されているのは屋久島、沖縄、九州の一部、本州では熊野の田辺市本宮町にある

「黒蔵谷」の森だけで、この日本固有種の植物群は九州・熊襲の「襲・四国・速水瀬戸の速」・紀州の「紀」をとって「襲速紀要素」と呼ばれ、黒蔵谷のある大塔山系は照葉樹のみでなく、ブナ林もあり、実に多様で複雑な生態系を持っています。

国道168号線を延々進んでゆくと、森林ばかりの光景が徐々に人の住む町に開けてゆきます。日本一大きな村である十津川村を抜けると、森林ばかりの光景が徐々に人の住む町に開けてゆきます。この山奥に田辺市本宮町があり、生きながら浄土とみなされた熊野三山へ辿りつき、生まれ清まり甦るといふ熊野古道の終着

点のひとつ・熊野本宮大社があるのです。

熊野信仰は元々の自然崇拜から山岳修験が発達し後に京の都から皇族の熊野参詣が始まり、さらに庶民まで全国から「蟻狂の熊野詣で」と言われるぐらゐ熱狂的な参詣者が行き交いました。南朝方ゆかりの伝説、源平の合戦にまつわる落人伝説などもあり、中世の歴史に深く関わる物語が多く残され、その歴史の中で様々な地域の伝承と伝統芸能も生まれてゆきました。



黒蔵谷の深谷。上流にダムがないので水が澄んでいて夏でもひんやりしています。(写真:み熊野ねつとより)

「本宮町の盆踊り」

さて熊野の祭や芸能について、まずは私の住む本宮町の地域伝統芸能のことを書いてみましょう。

町には各地区の盆踊りや神社のお神楽があり、いずれも地元の素朴な行事ですが8月13日〜15日にかけての夜は「先祖様のご供養に町内で同時多発的に盆踊りが繰り広げられます。文化財指定を受けている踊りは以下の通り。

盆踊り自体は地藏盆を含めるともつとあつて一度に全ては観られません。普段は静かなこの町も盆の行事になると里帰りの人も増えて盛り上がり。文化財指定を受けていない地区でも、例えば下湯川地区の盆踊りにはかつて大和万歳が入り込んでいたことが唄われている曲があったり、地域の歴史がうかがえて興味深いです。



和歌山県指定無形文化財
おおぜ
「大瀬の太鼓踊り」



和歌山県指定無形文化財
ふしおがみ
「伏拝の盆踊り」



和歌山県指定無形文化財
へいしがわ
「平治川の長刀踊り」



和歌山県指定無形文化財
つちごや
「土河屋のお夏清十郎踊り」



和歌山県指定無形文化財
あき
「秋の餅搗き踊り」



田辺市指定無形文化財
「ハイヤーハー踊り(熊野本宮踊り)」

わたしの地狂言雑記

舘野太朗

地芝居ってなに？

僕は歌舞伎に出たことがありません。

そのことをひとに話す、「そんな家出身なんですか？」とよく驚かれます。僕が出演していたのは、「地芝居」といって、素人のひとたちが演じる歌舞伎です。土地のひとが演じる芝居だから、芸能の研究をしているひとたちは「地狂言」とか「地芝居」とよんでいます。土地によつては、農村で上演されているから「農村歌舞伎」といつたり、岐阜県のほうでは「地歌舞伎」といつたりする「こと」もあるそうです。

都会で成立した歌舞伎が地方に流れ込んできたものが地芝居なので、「本物」の都会の歌舞伎に対して、田舎の「ニセ物」のように

みられてきました。だけど、神社の舞台に花道をかけて歌舞伎の舞台をつくり、近所のおじさんが化粧をしてでてくるのを地べたに座つてわいわい見物できるのは地芝居ならではの、都会の歌舞伎とはまた違った楽しみがあるのでないでしょうか。

地芝居の出会い

僕は中学1年生のときにはじめて地芝居に出演しました。

伝統芸能でも、民俗芸能でも、楽器でも、スポーツでもなんでもいいのですが、なにかそういう芸事や習い事を子どもがはじめるときには、家族の影響というか半分「やらされる」かたちになることが多いとおもいます。物心がつく前からやらせないと大成しないみた

いな「こと」もよくいわれますね。

僕の場合、両親はじめ家族に芝居をみるようなひとはひとりもいませんでした。だから、小さいときから歌舞伎をみていてそれがきっかけとなつてはじめたというわけではありません。ただ、小さいころから祖父母とす「す」ことが多く、時代劇を小さいころから好きでよくみていました。あと、小学校でときどきやる芝居は、「見る」より「出る」ほうが好きでした。

僕は小学校4年まで千葉市的美浜区という団地の立ち並ぶ埋立地で育ちましたが、父の仕事の都合で横浜市の泉区というところへ引越すことになりました。横浜

という「港」「都会」なイメージがありますが、泉区は昭和にはいつたに横浜市の最後の拡張で鎌倉郡から編入されたエリアです。農業や畜産も盛んで最寄りの駅で電車の扉が開くと、そういう香りのするわりとのどかなまちです。

泉区には「いずみ歌舞伎」という地芝居があり、1998年に出演者が全員子ども「子ども歌舞伎」をはじめするために、区内の小中学校から出演者を募りました。それに「時代劇みたいな扮装で劇ができるなんて最高じゃないですか!」とおもい応募したのが、僕と地芝居の出会いとなりました。

泉区の位置



いずみ歌舞伎のこと

泉区では江戸時代のわりごろから太平洋戦争のまえまで地芝居が盛んに行われていたようです。戦前には市川花十郎という役者が区内に住んでおり、県内の祭礼をまわって興行をおこなっていました。花十郎の存在は戦後長いこと忘れられていたのですが、昭和のおわりごろから郷土史に関心をもつ人々たちによって再発見されてゆきます。

1991年に花十郎家の蔵が改築のために取り壊すときに、蔵の中にあった衣装、義太夫本などの一部が横浜市歴史博物館に寄贈されることとなりました。1993年には「市川花十郎衣装披露公演泉村芝居発表会」が催され、花十郎の衣装、背景幕などが披露されました。この催しは花十郎の足跡を追ったこの郷土史研究グループが中心となって企画し、会場の泉区民文化センターのオープン記念行事でもありました。また、衣装展でありながら、衣装を展示するという体裁をとらずに、衣装を実際に着用した区民が舞台に上がり、かつての芝居の名場面を再現する方法で行われました。

た。

この衣装展がきっかけとなって、かつての地芝居を区伝統芸能として「復活」させようという気運が盛り上がり、泉区が区政10周年を迎える1996年に記念事業として発足したのが「いずみ歌舞伎」です。毎年秋に区内で公演を行うほかに、区外のイベントにもたびたび出演しています。

横浜市内の地芝居としてはほぼ唯一の存在、いずみ歌舞伎には他の地芝居とはすこし違ったところがいくつかあります。

ひとつめは、公演の場所と舞台です。地芝居というと、映画『大鹿村騒動記』のように村の神社に舞台があつて、そこにみんなが集まってみるというイメージをもっているかたも多いとおもいます。泉区でも、かつては神社の舞台を使って興行をしていたのですが、いずみ歌舞伎では区内の公会堂を使っています。最近ホールで公演をおこなう地芝居も多いのです。歌舞伎の舞台で欠かせないものといえば、観客席に張り出した「花道」。いずみ歌舞伎では、公会堂の客席を一部撤去して花道を設置しています。年に1度、泉区には芝居小屋ができることになりました。また、大道具は東京の大歌舞

伎とおなじものを借りており、舞台はかなり見ごたえがあります。

ふたつめは、衣装と小道具。僕は衣装が地芝居の見所のひとつだとおもっています。というのも、地域で受け継がれてきた衣装は、演技が無形の遺産だとしたら、有形の遺産にあたるものです。地芝居が盛んだった時代は、村の資金で衣装を買ひ求め、隣村に貸し出したりということがあったそうです。いずみ歌舞伎の場合、花十郎の衣装や道具は博物館にあり、区内には残っていません。そこで、いずみ歌舞伎では衣装や小道具はその年の演目にあわせたものを会員が自作しています。公演のまえに宣伝を兼ねて、衣装・小道具展を行うほど気合をいれてつくっています。他の地芝居とはちがいますが、やはり衣装は見所ですね。

そして演目。地芝居では一般的に時代物の義太夫狂言が好まれる傾向にあります。義太夫狂言というのは、もともと人形浄瑠璃だったものを歌舞伎にうつしたもので、時代物というのは江戸時代における時代劇という意味です。よって、武者やお姫様が出てくる重厚な演目が多いです。何度もみてみるとだんだんおもしろさがかつてくるのですが、初めてみる人

は寝てしまっほど取っ付きにくいものもあります。いずみ歌舞伎では、世話物や舞踊も多く上演します。泉区は戦後に人口が増えた地域であり、かつての地芝居を知っているひともいますが、東京の歌舞伎のイメージでやってくるひとや、芝居をまったく知らない見物も多いです。よって、演目はわかりやすい世話物や、重厚な時代物などをバランスよくとりあげています。



あなたの 祭りに対する想いを 教えて下さい

あなたの祭りに対する熱い想いを記事にしてみませんか？
「MATSURISTA!」では、みなさまからの投稿を募集しています。

■募集要項

- ・コラム、レポート、論考など形式は自由。
- ・字数は2000字～20000字程度(応相談)。
- ・写真やイラストも掲載可。多めを推奨。
- ・〆切は夏号は5月末、秋号は8月末、冬号は11月末、春号は3月末。
- ・形式はword,textなど。レイアウトは基本的に、編集部で行います。
- ・投稿される場合は〆切2週間前に下記メールアドレスにタイトルと簡単な概要をお知らせください。
- ・文章に自信が無い方はアンケート形式の電話やメール取材にも対応しています。ぜひあなたのまちの祭りをご紹介ください。

■特典

- ・『MATSURISTA!』2部
- ・『MATSURISTA!』オリジナルピンバッジ

■問い合わせ

maturista@gmail.com 質問・投稿・雑誌についてなど気軽にどうぞ
雑誌や記事についての感想も受け付けています。ぜひご連絡を！

祭り応援プログラム

あなたのまちの祭りを
盛りあげるお手伝い、いたします。

■プログラム内容

- ・祭りのUSTREAMを用いたインターネット生中継
- ・祭りのドキュメンタリーDVD制作
- ・祭りのPR動画の制作
- ・祭りを紹介するホームページ、チラシの作成
- ・ピンバッジ・マグネット・Tシャツなど祭りグッズの制作
- ・雑誌『MATSURISTA!』への記事掲載

■経費

- ・マツリスタ取材班(1~2人)の宿泊費、交通費(東京より)のみ!
※宿泊費は泊めていただける家があればいただきません。

■システム

- ・制作したDVD(2000円)は、保存会の方でも購入していただきます。
- ・制作したDVDの著作権はマツリスタに帰属します。
(ただし、保存会の意図しない販売は行いません)
- ・制作したDVDの保存会による再販売は可能です。

■問い合わせ

maturista@gmail.com まずは質問から気軽にご連絡ください

■新美優(にいみ ゆう)

1984年生まれ。愛知県出身。知立(ちりゅう)神社神楽保存会会員。大学時代の卒論で「神楽」を題材にして調べてるうちに、神楽の笛太鼓の伝承者になってしまったという変な経歴の持ち主。軽い気持ちで始めるうちに、どんどんと深みにはまり、今では他県にまで他の祭りや芸能を見に行くのが生活の一部となっている。現在興味のあることは、日本国内の民俗芸能の笛のこと。愛知県内のお囃子についても、見に行きたい場所がたくさんある。現在、絶賛調査中。お囃子あればどこへでも。

■大竹雅子(おおたけ まさこ)

横浜から当時林業に従事していた熊野の夫のところへ嫁ぎ17年目。民俗芸能STREAMのラジオでは時々「熊野のあの人」と呼ばれています。現在夫婦で熊野地域の情報サイト「み熊野ねっと」運営中。
<http://www.mikumano.net/> サイト内で「おさんぽフォトアルバム」という熊野地方のお祭りを取り上げたコーナーを担当。これからしばらく熊野と芸能について書いてゆきたいと思います。現在熊野古道の語り部をしながら無形文化財の盆踊り(平治川の長刀(なぎなた)踊り)「大瀬の太鼓踊り」「ハイヤーハー踊り(熊野本宮踊り)」と熊野本宮大社のお神楽に参加中。

■館野太朗(たちの たろう)

芝居研究家。1985年千葉生まれ、横浜そだち。2012年、筑波大学大学院人文社会科学部国際地域研究専攻修了。修士(国際学)。現在横浜市泉区在住。

■西嶋一泰(にしじま かずひろ)

1985年大分生まれ、東京育ち。立命館大学大学院先端総合学術研究科大学院生、日本学術振興会特別研究員。民俗芸能STREAM代表。各地の祭りを飛び回りながら、マツリスタをつないでいく活動を展開中。

編集後記

とうとう発行してしまいましたマツリスタ創刊号！ いかげだつたでしょうか。もし面白かったら口コミでぜひ広めてください。書籍を置いていただけるお店さんも募集中ですのでお願いいたします。

さて、まずタイトルですが、これはサッカーの影響です。こうサッカーのサポーターの熱い盛り上がりや、かっこいいデザインの雑誌もあるし、こんな感じで祭りや芸能も盛り上がれないかな、と思いついて、「祭り + i s t a (伊 っ 人)」で、「マツリスタ」に決めました。そして、祭りや芸能の歴史的学術的な価値云々よりも、まず現在そこにかかわっている人に焦点をあてていきたいというのも野望としては持っています。

その意味では今回の小岩さんのロングインタビューはかなり個人的なところから芸能との関わりについて話していただき、読み応えのあるものになっていると思います。大竹さん、館野さんの連載もまさに自分と芸能、祭りとの関わりからその世界を垣間見させてくれました。新美さんの連載は楽器の解説をしながらも、そこに匂い立つ(?)新美さんのお囃子愛が伝わってきます。今回紙面の都合で多く書けませんでしたので私の連載もみなさんの後に続きたいです。素敵な神楽絵を描いていただいた栗田さんありがとうございました。次号もお楽しみに！(西嶋一泰)

MATSURISTA! 2012年夏号

2012年7月1日発行

編集・発行 マツリスタ

代表 西嶋遥

Email matsurista@gmail.com

URL <http://matsurista.blogspot.jp/>

編集 西嶋一泰、西嶋遥

印刷所 (株)ポプルス

<http://www.inv.co.jp/~popls/>

電子書籍配信 ブクログのpapier

<http://p.booklog.jp/>

祭りにつながる故郷の新しいかたち



ウェブ・動画・ラジオ・雑誌で日本の民俗芸能や和太鼓の情報を発信するプロジェクト

民俗芸能STREAM <http://minzokugeinoustream.seesaa.net>

あなたのまちの祭りや芸能の情報を募集中

2012年7月1日発行

定価:500円

企画・編集・発行 マツリスタ

<http://matsurista.blogspot.jp>